

シンポジウム (全体討論) 近代を超える鍼灸

—何故、日本の鍼灸は、今ここに存在のか?—

司会：形井秀一 (筑波技術大学保健科学部)

嶺総一郎 (専門学校首都医校)

シンポジスト：香取俊光 (群馬県立盲学校)

坂部昌明 (森ノ宮医療大学)

箕輪政博 (千葉県立盲学校)

奥津貴子 (呉竹鍼灸柔整専門学校)

藤井亮輔 (筑波技術大学保健科学部)

小野直哉 (未来工学研究所)

嶺：本日の講演を振り返りながら、これから求められる鍼灸師の質ということを、シンポジストの先生方にお話いただきたいと思います。

香取：教育全体の質は私の中でありますが、今回は、視覚障害者のことについて、お話をさせて頂いたので視覚障害者について話をしていきます。盲学校の現状は視覚障害者が減っている。一つは、自然の人口の減少にともなうものであり、もう一つは職業選択の幅が広がってきて、鍼灸を仕事にしている人が少なくなっている。収入が少なくなっていることが理由です。日本の鍼灸に盲人の偉人がいましたが、これから偉人が生まれるかということ、現状は行き詰っている。質の高い教育をして、どれだけ技術を教えられるのか考えています。

坂部：私は近代の話をしましたが、私としては、肉を切らして骨を絶つではないが、こちら側としては、不利でないかと思われる位のことで、位置付け次第で有利になるんです。例えば、鍼の診療報酬を決めてしまえば、皆さんの行為は必然的に診療報酬上の請求が発生するものなんですね。そうすると、医者やるんじゃないか、看護師やるんじゃないかと議論がありますが、すぐに養成できるはずないんです。じゃ、医者に鍼を渡して打つてといっても、誰も打ってくれませんから。私が医大に行っていたときに医者に鍼を打ってくださいと言っても、ごめんなさい、鍼をどうやって打つのか知らないと言います。そんなレベルの人たち。だけど、診療報酬がつけば、

鍼灸は混合診療ではなくなるんです。おもしろくないですか。そういうことに乗れるか乗れないかというのが、私個人としては、鍼灸というものの価値ではなくて、鍼灸師さんの立場、自分たちがどうしていくかが難しい。鍼灸が医療行為だと言われても、あまりみなさん嫌がらないんですが、鍼灸師が医療をやっているという言い方をすると嫌がる方がいるんだと思うと、その点の齟齬とされていることに自分たちがいかにトライするかがおもしろいのではないかと思います。最近、不動産業を手伝っているんです。世の中に実印と認め印の違いさえ分からない人達も出てきているので、このままいくと、質とかの問題ではなく、国民全体のリテラシーが低くなっていっている中で、少なくとも専門家自体の立ち位置をもう少し引き見て、もう少し自分達のいいところを取りにいかないといけないとまずいのかなと思います。

箕輪：そもそも反制度化 (化一が?) 誰が得しているのか。反制度で、食ってきている人は、もう少しやらないとだめですね。自由診療でやっている人たちは反制度のメリットをこうむっていないと思います。ということは、反制度はいったい誰のためにできたのかということです。それから、端的にいうと、私は、鍼灸大学の偏差値を最低 50 以上にすると一つ。以上です。

奥津：今、私は鍼灸学校に勤めていますが、年々受験者が減少しています。そういうこともあり、今では教員自らが受験生を集めるために、高校で開催される進路説明会に

参加しています。進路説明会に医療分野、あるいは鍼灸・柔道整復分野ということで参加するのですが、他にも、コンピュータ分野、ファッション分野、美容分野、そしてトリマー・酪農などの動物関連分野など、様々な分野の学校関係者が参加しています。医療分野では、鍼灸・柔道整復以外に、看護師、理学療法士、作業療法士、歯科衛生士などの学校が参加しています。しかし、それらの分野と比較すると、鍼灸・柔道整復分野の説明を聞きに来る高校生は非常に少ないのです。時には、ゼロということもあります。説明を聞きに来ていても「学校の先生に言われたから」(注)ということもよくあります。

(注) そのように答える高校生に詳細を聞くと、聞きに行きたいと思う分野がなく、学校の先生に相談したところ、「とりあえず、どの分野のブースでもいいから話を聞きに行ってみたらどうか。今なら、鍼灸・柔道整復分野のブースが空いている」と促されたので聞きに来たということが多い。その先生自身が鍼灸・柔道整復に理解を持った上で高校生に勧めたということではないようだ。

なぜ、このようになってしまうのでしょうか。もしかしたら、鍼灸について高校生はもちろん、その親や先生が、よく知らない、あるいは魅力を感じていないからということもあるのではないかと思います。では、どのようにすれば良いのでしょうか。それには、私達が鍼灸について、漫画など、誰でも分かりやすい媒体を使ってどんどん発信していけば、多くの人が鍼灸に興味を持ち、治療を受けてみようと思うようになるのではないかと思います。世の中がそうなれば、高校生も興味を持ち、鍼灸学校を受験するようになってくるのではないのでしょうか。そうなれば、業界は活性化し、鍼灸師のレベルアップにつながるのではないかと思います。今は、私達をもっと鍼灸をアピールしないとイケない時代だと思います。皆さん、頑張りましょう。

藤井：今日の発表では触れられなかった

が、色々問題があるとはいえ、ここまで日本の鍼灸が発展してきた。その原動力になったのは、学校であると同時に、教員なんですね。教員の養成が行われた。極めて早い時期に行われた。明治36年から行われている。台湾に日本の鍼灸あん摩の制度を持って行った。しかし、韓国も台湾もその後どう展開したか。日本とは全く違います。一概には言えないけれども、決定的に違うのは教員養成の制度を置かなかった。ですから、教員養成の制度を置かなかった観点から、鍼灸師の質を考えると、まず、教員の質を上げなければいけないと思います。一体全体、臨床家を育てるという使命があるとすれば、教員の臨床力がいったいどうなっているか。その辺が、担保されていますか。このあたりが非常に大きい問題になってきています。

ホンダのキャッチコピーでしたか、本物に触れ、本物に学び、本物になるというんです。すばらしいじゃないですか。学校に入学してきた鍼灸師の卵たちが本物に触れるというのは、まず教員なんです。教員の資質ということだと思います。今回の検討会でも問題になっています。今後も議論されていくと思います。

小野：質はさまざまです。質をたかめるということでしたら、各自各分野でそれぞれが質を高めるほかないと思います。私なりの質を高めるということを考えると、京都に住んでおり、坂部さんも京都に住んでいるので、情報交換をするのですが、自分たちは自分たちの分野の跡継ぎを作っていかなければならない。今のところ、〇〇関連のことは自分たちくらいしかいないので、やっていかななくてはいけない。例えば、社会鍼灸というような場所に来て、質問なり、議論とかそういうことができるような商業関連の人たちに自分の立場で影響力を与えていくかということしか、私にはできない。それをどうやっていけばいいか。それは、文章とか発表する内容をどう考えていくかが、鍼灸の質を高めていくことにつながると考えます。

嶺：はからずも今日、6名の発表の中で、

質というキーワードが出てきました。質を高めていくということが近代を超えていくことになるのではと思うのですが、できるのでしょうか。

小野：近代を超えるというのは楽じゃないと思います。いつかはクラウン世代や私もバブルを知っています。そうすると色々と葛藤が起きるんです。特に近代を超えるという時に、対極にある言葉として、持続可能性がある。持続可能性を考えると日本の場合は少子高齢化、高齢者が多くなり、子供が少なくなっていくという状況ですので、せいぜい維持できるかどうか。その中で、経済活動や介護、医療を考えなくてはならない。高度成長ができたから、医療制度が整備できた。それが無い国はできない。それで、他の発展途上国は日本のように経済発展できないで高齢化に入っている。恐ろしい状況が実は待っている。医学部とかは、そういう状況が分かっている上で医者になっている人とか医療政策者になっている。自分たちがどのような状況であるのかわからないで臨床をやっている、わからないで日常を過ごしているということは、どこを目指すのかわからない。羅針盤がない。流されてしまって、時間が過ぎて人生が終わっていく。そこを流されないで、自分がやっていることは理があるのか考えていかななくてはならない。それが鍼灸をどうするかにつながると思う。

形井：フロアから質問がありますか。

織田：質の問題ということでお話が続いていますが、3日程前に鍼灸の国家試験に鍼灸実技がないのは信じられないと言われました。それに対して皆さんがどうお考えになっているのか伺いたいのが1つ。もう1つは、鍼灸学校でどのような教育がなされているのか一般の方に知られていない。そのようなことについて皆さんのご意見を伺いたい。

形井：順番に意見をうかがっていると時間が足りなくなるので、私は言うておきたいという方をお願いしたい。どうですか、坂部先生。

坂部：実技がないと言われますが、医学部

だって実技はやっていません。倉敷の病院ですが、入職する時に、鳥の皮を縫うとか、小さい折鶴を折らせることが有名になりました。なぜそれをやるかという、医学部の試験なんて信用していないからだと言われました。そういう病院があるということを見ると、私たちが表沙汰にしていない問題がいっぱいあるのではないかと思います。

私個人的には、実技云々もあるんだろうけど、今日話があるなかで、1つ浮き上がってくるのは、徐々に専門職の裾野の広い知識関係がなくなって行っていると思います。学べなくなってきている。一般教養といわれるものの幅が狭くなっている。もし、興味があれば調べれば出てくると思いますが、医務総監というものがあります。これは臨床型の行政のトップです。省庁のトップは大臣、行政のトップは事務次官です。臨床型のトップに技監のトップとして医務総監というものを作って、その医務総監は事務次長と同じレベルの職業にするという話です。だれが見ても、この2つのトップだとおかしくなるというのは見えてくる。それでいいのかということになると、技術のみならず、包容力・教養がないといけな。その辺の能力が見えないようにだけしようと思います(笑)。

箕輪：かつて、実技試験があって、その後なくなっている。これは、法律でなくなった。というのは世論ですよ。法律は世論で決められているのだから。国民が決められているのしょうね。私たちの意図もどこかにあるのかもしれないが、それから、学校教育が見えてこない。これは、他の学校教育もある意味、見えていないのではないのでしょうか。関心の低さからきているのではと思いますが。

奥津：私は、国家試験になった後に資格を取得したのですが、なぜ、国家試験になってから、試験に実技試験がなくなったのか理由を知りたいと思いました。それ以外にも鍼灸に関して多くの疑問を持っています。それらの疑問を解決していきたいと思いました。

藤井：先ほども少し話しましたが、国家試験となると統一した評価基準が作られていなかった。それと財源ですね。これが整っていなかったと記憶しています。それで、国民目線だと思います。国民の目から見て実技試験がないと知った時に、どう思うか。ましてや、患者さんに1本の鍼を刺したことの無い人が免許を取る場合があるとすると、国民がどう思うか。国民目線からいうと、最低限の実技力というものを担保する仕組みというものを当然必要だと思います。先ほど言った事情で実技試験がなくなったのですが、もしそれができないとすれば、それに代わるものを各学校が共通の評価基準をもって一定の基準をもってクリアするという。各学校がということで難しければ、第三者機関を持ってやっていくシステムを作るとか、工夫しなければいけないだろうと思います。

鍼灸のよさ、魅力をどのようにして知ってもらおうかというところは、長い視野でキャリア教育が今盛んになっています。幼稚園、小学校で将来何になりたいかという質問を大手保険会社がしていますが、その中に理学療法士が出現していますが、鍼灸あましはないのだろうと思います。七夕の短冊に自分は鍼灸師になりたいというのは見ないですね。子供のころのキャリア教育の中に、テキストの中に、鍼灸師の魅力を載せるとかが必要になってくるのかと思います。

香取：盲学校では、学校毎に必ず2年生か3年生に実技形式で患者さん(への臨床)を必ず、週に10時間位行わせている。そういう意味では、盲学校における実技は頑張っ

て行われているという状況です。職業の魅力という意味では、盲学校もどんどん生徒が減少していますから、収入を中心として、鍼灸あん摩を取った時にあまり魅力を感じない。障害年金があるので、20万を超える収入にならないんです。

形井：ありがとうございます。そろそろ時間ですが、小野先生10秒だけ時間をあげます。

小野：先程の嶺先生の近代を超えられるかということですが、私は近代を超えられると思います。否が応でも超えてしまうんだと思います。時代の要請上超えなくては行けない状況になるので。今は、超えられる超えられないと言っているけど、30年後には超えちゃっている状況になっていると思います。近代を超えるということは、近代西洋医学を否定するのではなく、過去の昔に戻るとかいう話ではないということ误解のないように理解していただきたいと思います。今までは、鍼灸の世界では、西洋医学化学や科学化が必要である、やっていなくてはならないことで、それをやった上での話で。それをやって、それだけでは立ちいかなくなっている社会になっている。そうした場合に、非効率で不合理なものを持っている分野は、今まで通りの使い方ではなくて、いかにどう使っていくか、イノベーションを絡ましていくと近代を超えられると私は思います。個人的には、それをやっていきたいと思います。

形井：今の先生の話をも、シンポジウムの締めにしたしたいと思います。シンポジウムの皆様ありがとうございました。